第 67 回講演会＜2022 年 6 月 22 日開催＞

米国高等教育における多様性、公正性、包括

David S. Goldstein（訳＝黒﨑 真）

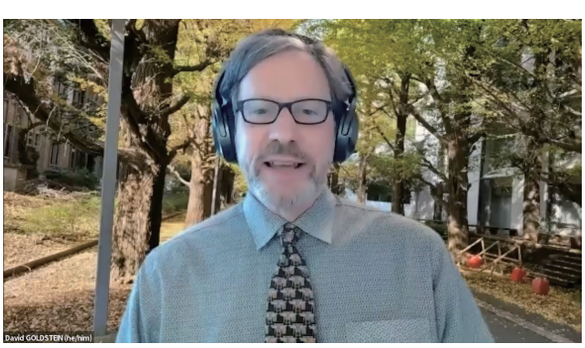
■ 講演者……David S. Goldstein
（米ワシントン大学ボセル校 教授）
■ 司　会……黒﨑 真
（本学外国語学部英米語学科 教授）
■使用言語……英語

講演要旨：

米国の大学では、社会正義の理念が進展し人口構成が変化することに伴い、キャンパスにおける多様性、公正性、包括（DEI: Diversity, Equity, and Inclusion）の議論と追求がますます活発になっている。米国の高等教育における DEI の可能性と限界を理解するためには、まず用語の定義を理解する必要がある。

「多様性」という用語は、人々がお互い様々な点で異なるという事実を承認することである。米国では通常、多様性の次元に含まれる属性には、人種、性別、ジェンダー、年齢、性的指向、身体的・認知的能力、社会経済的地位、宗教的信条、国籍などがある。日本における多様性の次元は、おそらく異なるだろう。

「平等（equality）」とは、各個人に対しその者が置かれている状況を考慮することなく同一の機会を提供することを特徴とする。他方、「公正」とは、必要に応じてリソース（教育、雇用、住宅、医療、福祉などの資源）を配分し、歴史的にリソースへのアクセスを阻まれてきた人たちにより多くの機会を与えることで、不均衡を是正することを含む。



David S. Goldstein 氏

私は DEI の政策を、国、大学、そして教室の 3 つのレベルで捉えている。教職員は国の政策にほとんど影響を与えられない。しかし、大学レベルなら、諸機関は多様な背景を持つ「学生」を募集し入学させることができるし、多様な背景を持つ教職員を募集し雇用することができる。また、大学は多様な個々人がキャンパスで活躍できるような文化を作り、そうした人たちを「採用する（recruit）」だけでなく「留めておく（retain）」ことも必要となる。

キャンパスや授業においては、ユニバーサル・デザイン、すなわち、特別な措置をとらなくても最初から誰もが利用可能な施設や教材を用いることができる。たとえば、映画を見せるときに字幕付きにすれば、聴覚障がいのある学生の助けになるだけでなく、その映画の使用言語に自信のない学生にも役立つ。

私たちが何かする際には、自分自身と学生にとって「成長ゾーン（growth zone）」にあたる帯域を狙うのがよい。「成長ゾーン」は、「快適ゾーン（comfort zone）」と「パニック・ゾーン（panic zone）」の中間に位置する。「快適ゾーン」にいると、学習や成長に対するやりがいを十分感じることはできない。他方、「パニック・ゾーン」にいると、不安になりすぎ、学習や成長ができなくなる。

学習と成長は「様々な体験」から生まれるので、私たちはキャンパスや教室で多様性を提供し、多角的な視点が代表され表現されるようにする必要がある。シラバスには、多様性を重視し、様々な見方を奨励し期待していると明記するとよい。また、教材は多様な考えや価値観を反映したものを採用すべきである。さらに、「PollEverywhere」といった教室で使える応答システム（CRSs: Classroom Response Systems）を活用すれば、発言の苦手な学生、障がいのある学生、指導言語に自信のない学生、少数意見を持つ学生が、匿名で自分の考えを共有することができる。

キャンパスや教室で DEI を促進することは、米国では挑戦的課題であり続けてきたし、日本の大学にとっても同じようになるだろう。しかし、実証的証拠が圧倒的に支持していることは、多様性、公正性、包括は、学生にとって、また社会に出てグローバルな環境を歩む卒業生にとって、そして社会全体にとって、より良い結果につながるということである。

司会の黒﨑先生

KUIS は、その使命とビジョンからして、DEI の取り組みにおいて国の先導者になれる良い位置にある。KUIS は、「世界の言語と文化を理解し、開かれた心でコミュニケーションできる人」を育成することで、「コミュニケーションのネットワークで世界を紡ぐ」ことを使命としている。KUIS は学生に、限りなく多様化する世界へ向けた準備をさせており、あらゆる背景を持つ人々とコミュニケーションをとり仕事をするための知識とスキルを与えていると私は考える。